

石屋のイロハ(7)

石屋の機械化 ①

今回は石屋に機械が導入された頃の話をしてします。

石を「切る」「削る」「磨く」作業は、職人から職人へ手仕事は脈々と受け継がれてきた訳ですが、昭和28年頃から急速に機械化されてきました。私の記憶では、店の鍛冶場(かじば)(道具を作ったり直したりする場所)の火床(ひどこ)に風を送る鞆(ふいご)に代えて送風機を導入。又、文字彫り作業は以前はノミとタガネとツツで行っていました。この道具に代わるものは、現在はエアー(空気圧)を動力にしたチッパーですがそれと同じ様なもので電気を動力としたものが導入されました。【図①】

(なお、現在の文字彫刻は高い空気圧を掛けて強い勢いで硬質の砂を噴射するサンドブラストという機械で行っています。)

石磨きは砥石を使い人力で石の表面をすりおろし、滑らかにしていました。これは大変体力と手間のかかる作業でした。それが機械化によって仕上げも良くなり、時間も短縮されました。その機械は移動式で角の砥石を3丁取り付け、モーターで回転させます。砥石の上から圧力を掛けるために石を乗せた研磨機でした。【図②】

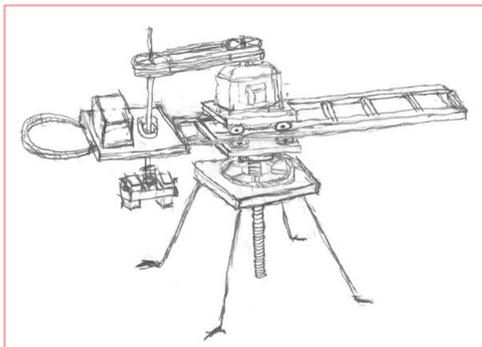
その後まもなく切削機が作業場に動き出しました。これは直径が8インチ(1インチ=2.5cm)の丸のこの先にダイヤモンドチップをつけたもので、1回の切り込み寸法が約4~5cm程度の小規模な物でした。【図③】しかしいずれもそれまでの手作業に比べると本当に驚きでした。能率も上がり、楽で、当時の職人たちにとっては夢の様だったと思います。(私はまだ小学生でした。)

その頃から現在までには、それぞれ同じ作業を行う機械も多くの改良と進歩によって、すばらしく便利になりました。続きは次回で紹介いたします。

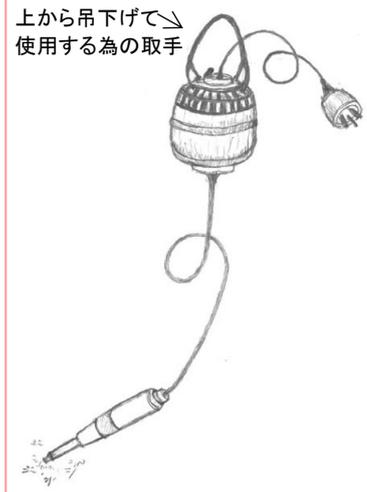
※今回の機械の絵は60年程前の当時の記憶を辿りながら描いてみました。

また次回の石屋のイロハもお楽しみに。

【齋藤繁樹】

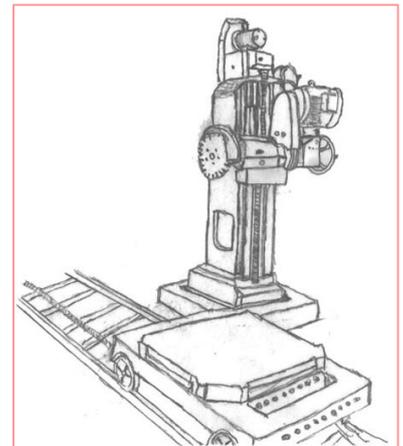


↑図② 石磨きの機械(60年ほど前の記憶のイメージ図)
左側に飛び出ている部分の下部に砥石を取付け、上から圧を掛けて研磨する。左端の輪っかは職人が砥石の位置を操作するハンドル。



↑上から吊下げて使用するための取手

↑図① 電動でノミ(タガネ)打ちをする機械(昭和30年頃)
図の左下にある先端にノミ(タガネ)が付いており、電動のモーターで先端が振動する事により石に当たった部分を削る事ができる。
従来の様にツツ(鎚)を振らなくて良くなった。



↑図③ 切削機
手前の台に石を乗せて移動し、本体に設置された直径8インチの刃で切削する。

編集後記

今号もお読みいただきありがとうございました。
この冬は雪が少ないので夏の時期に水不足になったりしないか、と少し心配しております。とは言え、日々の雪掻きが無いのはとても助かっております。春までに山には降って、里にはほどほどであればいいなあ、と願っております。ではまた。
【齋藤勇介】

このニュースレターに関するお問い合わせ・ご意見・ご要望はこちらまでお願いします。
お届け先の変更や、ニュースレター送付不要の際もお知らせいただければ幸いです。(担当: 齋藤 勇介)

(有) 齋藤石材店 〒950-3321 新潟市北区葛塚4804 Tel:025-386-3491 Fax:025-386-3493
E-mail:saitougs@beach.ocn.ne.jp ホームページ:http://www.saitougs.com/